

2020/07/12

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑥

『人のうちにあるものは何?』 ヨハネ 2:13-25

■ 商売人を追い出す

「ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。」(ヨハネ 2:13-17)

過越の祭りとは、イスラエル最大の祭りです。イスラエルがエジプトの奴隷だった時、神はモーセを通してイスラエルの民をエジプトから脱出させようとしていました。しかし、エジプト王がそれを拒んだため、多くの災いがエジプトを襲いました。その最後の災いが起きる前、神は小羊の血を門に塗るように命じました。その言葉に従った家は災いが過ぎ越し、イスラエルは無事に脱出できたのです。この神の恵みを覚えて行うのが過越の祭りです。この時、小羊の血を通してあがなわれたのは、イエス・キリストの十字架を象徴したものです。

このように、神様は常に見える出来事を、霊的な教えの象徴として用いられます。では、イエス様が宮から商売人を追い出したことは、霊的に何を象徴しているのでしょうか。

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」
(I コリント 6:19)

宮が象徴するものは私たちです。神が私たちの心の中に入られたので、私たちは神の宮となりました。つまり、この出来事は、神が私たちの内側に入られて、私たちの罪を洗い清めるということを教えているのです。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」
(I コリント 3:16-17)

バプテスマのヨハネは、イエス・キリストのことを「世の罪を取り除く神の子羊」と呼びました。神は人に罰を与えるために来たのではなく、罪を取り除くために来られたのです。イエス様が商売人を宮から追い出したのは、宮を壊したり、罰したりしているのではなく、

本来の宮の正しい姿を取り戻そうと掃除をしているのです。これが、罪を取り除くということです。

つまり、この出来事の霊的な意味は、イエス様は私たちの罪を取り除き、私たちの中を清めてくださるということです。

「そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せてくれるのですか。」イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。」(ヨハネ 2:18-22)

神殿とはイエス様ご自身を表し、十字架で死に、3日目によみがえることを意味しているわけですが、当時は弟子たちもそのことがわかりませんでした。しかし、イエス様が復活したとき、弟子たちはこのことばを思い出しました。

このように、イエス様の言葉には、表面的な意味と霊的な意味の二つがあります。

■ ご自身を彼らにお任せにならなかった

「イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。」(ヨハネ 2:23-24)

多くの方がイエス様を信じたのですから、喜ばしいことのように思えますが、「イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった」とあります。これは、原文を直訳すると「彼らを信用していなかった。ご自身を任せることもしていなかった」となります。なぜでしょうか。

「なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」(ヨハネ 2:24-25)

イエス様は彼らとは面識がなかったにもかかわらず、初めから彼らの「真実な姿」を知っておられました。それで、彼らを信用しなかったのです。つまり、彼らが御名を信じた理由は、罪の赦しを求めてではなく、生活の御利益を求めてのことだと知っておられたということです。神が人を信用し、その者に応答する基準は、その人が罪に絶望し、神にあわれみを乞うことです。彼らはそれを満たしていなかったのです。

神が人を信用し応答する基準、すなわち義とする基準は、次のたとえ話によってよく分かります。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」(ルカ 18:13-14)

■ 誰の証言も必要とされなかった

「イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」

(ヨハネ 2:24-25)

イエス様は、彼らを信用していなかったのと同時に、彼らにご自身を任せることもなさいませんでした。それは、「イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられた」からです。この「人」は、「彼ら」ではなく「イエス」ご自身を指します。

通説では、この「人」は前述の「彼ら」を指すとされますが、その説明はすでに「イエスはすべての人を知っておられたから」と述べられています。また、「人のうちにあるもの」の「人」は単数形なので、前文の「彼ら」ではなく「人間」全般を指し、「人間のうちにあるもの」という理解も可能ですが、それでは「彼らに、ご自身を任せていなかった」ことの説明にはなりません。

そうやって見ていくと、最も意味が通じるのは、ここでの「人」は「イエス」ご自身を指すとする読み方です。イエス様はたびたびご自分のことを「人の子」あるいは「人」とお呼びになっています。ここでの「人」は「アントゥローポス」という語が使われていますが、これは、イエス様をご自分を「人の子」あるいは「人」と呼ぶときに使われる単語で、イエスのメシヤ的な表示です。

つまり、イエス様が彼らにご自身を任せていなかった理由は、「また、イエスはご自身で、ご自分のうちにあるものを知っておられたので、ご自分についてだれの証言も必要とされなかったからである。」と説明されているのです。

■ 「真実な姿」を知るイエスの生き方

「イエスはご自身で、ご自分のうちにあるものを知っておられた」とは、イエス様はご自分の「真実な姿」を知っていたということです。それは、三位一体の神であり、この世界に遣わされた「キリスト」であるということです。人々はイエス様のしるしを見て、「この方こそキリストだ」と言いましたが、「ほらみなさい。彼らが証言するように、わたしこそがキリストである」と、彼らの証言を頼りに活動する必要など、イエス様にはありませんでした。そ

ればかりか、ご自分の「真実な姿」を知っていたにもかかわらず、公の場で、自分がキリストだとは一度も明かしませんでした。ただ、一部の弟子たちに、ご自分と「神」との関係を明かし、公では、先述したように、「人の子」というような言い方をなさいました。

自分が何者かを知り、自分について誰の証言も必要としないということは、自分のことを良く言ってもらうために、人の顔色を窺う必要もなかったということです。ここに「自由」があります。これこそが「真実な姿」を知る者の生き方です。

私たちは自分のうちにあるものを知らず、自分の「真実な姿」を知らないので、人が自分のことをどう思うのかを気にして、いつも人の証言に自分を任せて生きています。この違いにこそ、私たちの最大の問題があるのです。

■ 私たちの真実な姿

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」(ヨハネ 1:1-3)

私たちは、イエス・キリストという土台の上に建てられた神の宮です。私たちは、神の外に造られたわけではなく、神の一部であり、神の中に生きているのです。

なぜ1と1を足したら2になるのか、考えたことはないでしょうか。なぜそのような発想が生まれるのでしょうか。それは、私たちの中に「統一しよう」という運動があるからです。その運動とは、三位一体の神です。

神は、父と子と聖霊のお三方いらっしゃいますが、おひとりの神です。この統一が「愛」であり、それは互いを無条件で受け入れ合うということです。これが神の思いであり、私たちの思いの土台です。

人との統一を求めた結果、けんかや対立になる場合もありますが、そもそも人が人と関わろうとするその原点は神です。人は気づいていないだけで、神があなたの中に働いて生きておられるのです。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」
(イザヤ 43:4)

あなたが「神の宮」であるということは、あなたはすでに無条件で神に受け入れられているということです。このことを知れば、人からの証言は必要なくなります。自分が何者かを知らないから、人の証言や承認を求めて、苦しみを覚えるのです。だから自分の真実な姿に気づくことが、苦しみの解決になります。

イエス様は自分が何者かを知っているから、人の証言を必要としませんでした。あなたには絶対的な価値があり、神の目には尊いものです。そのことを知るとき、私たちも、自分を

人に任せることなく、独立と自由を得、解放されるのです。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ 2:20)

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしましょう。」(ガラテヤ 5:1)

イエス・キリストが十字架で死なれたのは、あなたを愛していることを示すためです。その意味を本当に知る時、あなた自身もこの世に対して死ぬことができます。それは、この世に自分を任せてきたことや、この世の証言を必要としてきたことに対して死ぬということです。すると、キリストが私のうちに生きておられたと気づき、自由を手にすることができるのです。奴隷のくびきとは人の証言に自分を任せることの象徴です。

あなたは自由でしょうか。それとも奴隷のくびきを負って生きているのでしょうか。自由を手にするには、この世に対して死ぬ必要があります。死んでしまえば、人の証言や評価を求める必要はありません。聖書が「キリスト以外誇りとするものがあってはならない」と教えているのは、人の証言を求めて生きることが自分を苦しめるからです。

イエス様は、自分を知っていたから、人の証言を必要とせず、人のことばに自分を任せませんでした。古い自分に死んだことを信じれば、それがあなたを自由にします。

「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家すべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」
(イザヤ 46:3-4)

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」(イザヤ 63:9)

「神が私たちを背負っていた。」これが神と私たちの関わりであり、私たちの真実な姿です。神が私たちの土台であり、私たちは神の御手の中で動かされています。この事実を信じることができるかどうかポイントです。私たちは人の言葉を信じる以上に神のことばを信じるべきです。神だけが真理を知っており、真理が私たちを知っているのです。自分の考えが自分を自由にするわけではありません。あなたが人の証言を求める限り苦しみ続けることになります。

イエス様が彼らを信じず、ご自分を任せなかった理由は、自分の真実な姿を知っていたからです。これこそが私たちの目指すべき自由です。